

---

---

# □ オーケストラ

## 寺西基之

---

ここ数年、日本の楽団は音楽監督や首席指揮者の交代が多い。2015年も注目すべき動きが幾つかあり、NHK交響楽団は首席指揮者にパーヴォ・ヤルヴィが就任、東京都交響楽団は大野和士を音楽監督に迎え、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団には高関健が常任指揮者に就任した。地方オケでは札幌交響楽団が首席指揮者にドイツの名匠マックス・ボンマーを迎えている。いずれも滑り出しは好調で、とりわけN響のヤルヴィ就任記念の10月の定期演奏会では普段の定期と違って若い聴衆が多く見られたし、一方大野和士は、ちょうど都響が昨年創立50周年にあつていたことで秋には楽団を引き連れてヨーロッパ・ツアーも行なうなど、早くも“都響の顔”としての存在感を示している。高関体制となった東京シティ・フィルは早速に積極的なプログラムを打ち出し、札幌はボンマーの就任記念にメンデルスゾーンの「賛歌」という大作ながらも地味な作品を取り上げ、今後の方向性を示した。

また東京フィルハーモニー交響楽団は、音楽監督や首席指揮者を置かず、特別客演指揮者にミハイル・プレトニョフ、首席客演指揮者にアンドレア・パッティストーニを迎えている。そのプレトニョフは就任記念演奏会になるはずだった4月の公演こそ身内の不幸でキャンセルしたものの、秋の定期でリムスキー＝コルサコフのオペラ「不死身のカシチェイ」の演奏会形式による名演を聴かせ、パッティストーニは5月定期でブッチェーニの「トゥーランドット」をやはり演奏会形式で取り上げて聴衆を圧倒するなど、この2人を中心とする東フィルの新たな発展を期待させた。またオーケストラ・アンサンブル金沢もマルク・ミンコフスキが首席客演指揮者として新たに指揮者陣に加わり、就任披露としてシューマンの交響曲全曲を演奏して話題を呼んだ。古楽畑出身らしい彼の新鮮なアプローチはこれまでのアンサンブル金沢になかったものを今後もたらずことになりそう。

オーケストラにとって音楽監督や首席指揮者が変わることは、その楽団にとって大きな節目となる。これまで挙げた新シェフはそれぞれの楽団と上々の滑り出しをみせているが、その成果が本当に出てくるにはしばらく時間が必要だ。その点、すでにシェフと楽団の間に密の関係が築かれて、独自のカラーが確立されている例として、シルヴァン・カンブルラン&読売日本交響楽団、アレクサンドル・ラザレフおよびピエタリ・インキネン&日本フィルハーモニー交響楽団、ジョナサン・ノット&東京交響楽団、広上淳一&京都市交響楽団、パスカル・ヴェロ&仙台フィルハーモニー管弦楽団、飯森範親および鈴木秀美&山形交響楽団、オーギュスタン・デュメイ&関西フィルハーモニー管弦楽団、秋山和慶&広島交響楽団などが挙げられよう。また、まだシェフが就任して間もないもののその成果が現われつつある例では、川瀬賢太郎&神奈川フィルハーモニー管弦楽団、大友直人&群馬交響楽団、井上道義&大阪フィルハーモニー交響楽団、飯森範親&日本センチュリー交響楽団、小泉和裕&九州交響楽団などがある。

一方で、大阪交響楽団はこの楽団独自の路線を築いた児玉宏

が退任して2016年より外山雄三がミュージック・アドバイザーになることが発表されており、新日本フィルハーモニー交響楽団も2016年にこれまでのインゴ・メッツマッハーとダニエル・ハーディングを軸とする指揮者陣から上岡敏之にバトン・タッチされ、また名古屋フィルハーモニー交響楽団は期待されていたマーティン・ブラビンスと密な関係が築けぬまま、やはり16年に小泉和裕に交代する。こうした交代期は楽団にとって難しい時期であり、今後の成り行きが気になるところである。

2015年の注目公演は枚挙に暇がないが、特に話題を呼んだものとしてカンブルラン&読響のワーグナー「トリスタンとイゾルデ」(演奏会形式)があり、シュトゥットガルト歌劇場での上演の際のキャストを中心とした歌手陣の素晴らしさもあって、稀に見る高いレベルの演奏となった。下野竜也&九響による三善晃の「夏の散乱」[「焉歌・波摘み」]とシュニトケ「長崎」という組み合わせのプログラムは、戦後70年に相応しい内容であった。秋山&広響のシベリウス交響曲全曲チクルス、寺岡清高&大阪響のドヴォルザーク交響詩全曲、飯守次次郎&関西フィルのメンデルスゾーン「聖パウロ」をはじめ、地方オケが地味ながらも意義あるプログラムを組んでいたのも注目されよう。ノット&東響の定期では、メトロノーム100台のリゲティ「ボエム・サンフォニック」に始まってショスタコーヴィチの交響曲第15番で終わるメッセージ性の強いプログラムが大きな話題となった。都響も定期で毎回のように現代曲やレアな作品を入れるという果敢な姿勢を見せた。

その他、紀尾井シンフォニエッタ東京が創立20周年を迎え、その特別記念演奏会としてトレヴァー・ピノックの指揮でバッハの口短調ミサを取り上げたことも特筆されよう。古楽オケでは鈴木雅明&バッハ・コレギウム・ジャパンがバッハの世俗カンタータや、モーツァルトのハ短調ミサで名演を聴かせた。鈴木秀美&オーケストラ・リベラ・クラシカをはじめとする他の古楽オケ、室内オケもそれぞれに特色ある活動を続けている。

毎年この欄で触れていることだが、オーケストラにとって意欲的な企画を打ち出すことは、楽団の独自性を出すために必要である一方、採算は取りにくく、そうでなくても財政面で苦しい多くの楽団にとって大きな負担となる。今の日本経済の状況の中で多くの楽団がやりくりしに苦労しており、好転する兆しはみえてこない。中には存続の危機が心配される楽団もあるようだ。入場者増加やそのためのプログラムの工夫、協賛企業の獲得などの資金集め、事業の効率化など、各楽団ともそれなりの努力をしているが、それだけではどうにもならないのがオーケストラという組織の宿命で、どうしても公的補助が必要となる。とりわけ大所帯のオケにとって大きな支援となるべきは国の助成だろうが、平成27年度はもともと財政的に余裕があつて経費のかかる企画を打ち出した楽団に多くの助成がいきついで、楽団の格差を広げてしまう傾向がみられた。28年度以降に向けてこのたび新たに入場料収入に連動した助成方針が打ち出されたが、それはそれで大衆迎合的な企画に向かつてしまい、独自性のある斬新なプログラムが少なくなってしまう恐れもある。また、楽団が年度予算を組む段階では国からその年度にどのくらいの助成が出るかが分からないため、見込みで予算を立てざるを得ず、結果的にそれが大きく外れてしまう場合があるのも問題だろう。これからオリンピックに向けていかに文化を振興していくかが問われている今、日本のオーケストラの活動が活発化し、世界にアピールできるようなクリエイティブな企画の打ち出せるような支援のあり方を望みたいものである。